

彦根市埋蔵文化財調査報告第9集

葛籠北遺跡

1985

彦根市教育委員会

序

葛籠北遺跡の発掘調査は、(仮称)彦根市立第2南中学校新設に伴い実施したものであります。遺跡は、古墳時代から中・近世に及ぶものであり、この地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものであると考えております。とりわけ、古墳時代後期の遺構は、この時代の葬制を知るばかりでなく、社会組織を探る上で大きな手がかりを与えてくれるものであります。

学校教育・社会教育の別なく、自分達の住んでいる地域の歴史を知る事は非常に大切な事であり、現地説明会や連報展での多くの方々の熱意から、歴史に対するニーズの高さをあらためて痛感しているところであります。今後とも、多くの歴史を学ぶ機会を作りに行くとともに、恒常的な学習の場を設定していく必要があると思われます。

文化財は、全ての国民が共有すべきものであるだけでなく、子々孫々まで手渡して行かねばならないものであります。本報告書が、その一助となれば幸いです。

文末ではありますが、本調査に御協力下さった地元の方々をはじめ関係諸機関の方々に対し厚く御礼を申しあげます。

昭和61年3月

彦根市教育委員会

教育長 河原保男

例　　言

1. 本書は、滋賀県彦根市西葛籠町553番地他に所在する葛籠北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、(仮称)彦根市立第2南中学校新設に伴い彦根市教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 現地における調査は、昭和60年2月16日から同年5月31日までの期間を要し、その後整理作業にあたった。
4. 調査は、社会教育課技師本田修平が担当し、現地における作図等は主に調査協力員桂田峰男（現山東町教育委員会）、円城伸彦（岐阜経済大学OB）、沢田其高（岐阜経済大学OB）がおこなった。
5. 調査・整理には、原弥助・立岩義一・久米正雄・辻森敏雄・北川正吉・若林正亮・若林芳雄・若林善五郎・若林武藏・茶木元次郎・寺村千紗子・大堤須美子・亀岡よし・若林佳子・若林節子・北村貴美子・中田茂行・中川雅博・川田國央・黒田昌宏・植野克志・鵜野浩司・吉岡俊幸・田中義次・安田正利・林孝好・長野忠義・川島英規・中嶋一人・伏木和子・満島満江・川村和枝の諸氏が参加した。また、遺物の保存処理には滋賀県埋蔵文化財センター中川正人氏を煩わした、記して感謝したい。
6. 本書の執筆・編集は、本田修平がおこなった。

目 次

1.はじめに	1
2.調査結果	3
3.まとめ	12
4.出土遺物観察表	14
5.断面図土色表	20

図 版 目 次

図版 1 調査位置と周辺の遺跡	21
図版 2 トレンチ配置図	22
図版 3～9 遺構図	23～29
図版10～15 出土遺物実測図	30～35
図版16～21 遺構写真	36～41
図版22～26 遺物写真	42～46

1.はじめに

葛籠北遺跡の所在する西葛籠町は、犬上川南岸の甲良町と本市が接する所に位置している。西葛籠町は旧中仙道に沿って広がっており、現在では若干工場等で開発されているとはい、往時を~~あわせ~~せるたたずまいを残す。

現在の犬上川は大方町・竹ヶ鼻町等が所在する微高地に阻まれ屈曲して琵琶湖に注いでいるが、戸賀町から清崎町までの集落の並びは旧犬上川デルタの位置を示している。このデルタから旧犬上川の流域がある程度復元できるとともに、西葛籠町が犬上川扇状地の末端部に営なまれた集落であることもわかる。扇状地末端部は、扇状地で伏流した地下水が湧水として地表に出て来る所であり、この湧水を農業用水とする水田開発が比較的しやすい地域であると考えられる。

昭和55年度に発掘調査を実施した堀町の横地遺跡では、古墳時代後期の小円墳を中心とした遺構群を確認しているのをはじめ、弥生時代以降の遺物が出土している。この他、発掘調査が実施された遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構面が確認されている極楽寺遺跡、県教育委員会の手で発掘調査が実施された甲良町の長畠遺跡等があり、犬上川水系として一つの歴史的まとまりを考える必要があるだろう。

葛籠北遺跡は、西葛籠町の北側の農地に所在し、旧中仙道と国道8号線の間にある。当地付近には藪でおおわれた高まりが残されており、これ等の1部は池等がある事から湧水地であると考えられるが、古墳と思われるものもある。

従来、西葛籠町では西葛籠遺跡として古墳1基が知られており、昭和50年度滋賀県教育委員会発行の『滋賀県遺跡目録』では南河瀬遺跡として古墳1基が記載されている。調査地の現状は田であるが、以前は桑畑であったとの事である。地元の人の話では、耕地整理の時に土器や鉄刀が出土したとの事で、また平たい石が出て来たので家に持ち帰り沓石に使っているとの話もあった。これらの話は、後期古墳の存在を十分に予想させるものであった。

葛籠北遺跡は、(仮称)彦根市立第2南中学校建設予定地で発見された遺跡で、以下に調査に至る経緯を記す。

彦根市では、かねてよりマンモス校である市立南中学校の分離を計画していた。この計画に基づき、新中学校建設予定地として西葛籠町北側の農地が上げられ、この地域の埋蔵文化財確認調査依頼が当教育委員会に提出された。当教育委員会では、昭和59年11月12日に現地調査を実施した。この結果、該当地域で古墳時代後期から奈良時代にかけ

ての須恵器片の散布を確認し、ただちに結果を報告するとともに協議に入った。該当地は、現在買収交渉中であるため、買収が完了した地点から事前の発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知は、昭和60年1月17日付で彦根市長井伊直愛より提出があり、同時に発掘調査依頼の提出もあった。これを受けて当教育委員会では、発掘調査を計画し、昭和60年2月15日より調査を実施した。

発掘調査予定地のミクロ的地形は、西葛籠町から北西（琵琶湖側）に向って広がる舌状の微高地をなしており、調査対象面積は約3万m²を計る。このため、先ず遺跡の範囲を確認する事を主目的とし、重機にてトレーニングを設定する事から始めた。トレーニングにより遺構面が確認できた地点では、基本的にトレーニングの拡張やその横の地点にトレーニングを設定して遺構の性格を把握する事とした。このため、トレーニングは図版2のトレーニング配置図の様になるとともに、最終的には~~2ヶ所~~のトレーニングを設定した。ただし、トレーニングの設定は買収の終了した地点からおこない、買収と並行して調査を実施したため、多くのトレーニングは田1枚にトレーニング1ヶ所を設定する形になった。

前述した舌状の微高地は、現状の地形で学校予定地を北東端として大和バルブの工場がある地点を南西端とし、国道8号線の手前まで広がっている。このことから、調査以前にはこの微高地上に遺跡が立地している事が予想されたのであるが、調査結果から言えば、調査地域の北端部と南西側で遺構面を確認した。調査地域の中央部は、砂疊層の無遺構面であり、この砂疊層は東西に走っている事を確認した。立地条件の悪い砂疊層を避けて遺構を作っているとともに、旧犬上川の活動が激しかった事がうかがえる。ただし、この活動は今回確認した遺構の最も古いものが古墳時代後期のものである事から古墳時代後期にはすでに終了していたものであり、この時代には安定した微高地が形成されていたものと思われる。

以上の事より葛籠北遺跡は、西葛籠町の集落が位置している所より伸びる舌状の微高地上に立地しており、この舌状の微高地は犬上川扇状地先端部の激しい河川の沖積活動の結果形成されたものである。この活動は、葛籠北遺跡の営なまれた時代には安定した地形になっており、この地域に後期群集墳を形成する様な集団が存在していた事を物語っている。

2. 調査の結果

本調査は、前述した様に範囲を確認する事を主目的とし、各所にトレンチを設定し遺構の有無を確認する方法をとった。このため、遺構が確認できなかったトレンチは200分の1の縮尺でトレンチ配置図を作成するだけにとどめた。1～7トレンチがそれであり、これ等のトレンチの基本土層は、耕作土層が30～50cmあり、第2層の褐色粘質土層(床土)が10～20cm、第3層はマンガン等が強く沈着した茶褐色疊混り土層が10～20cm、第4層が砂疊層となる。この砂疊層を重機で1部深掘りしたが、砂疊の粗い細かいはあるが地表下約1mまでは確認した。

遺構は、8～20トレンチで確認しており、その基本土層は調査地域中央部東西に前述した様に無遺構面が走るもの的には同一の土層を示している。40～60cmの耕作土の下に褐色粘質土層(床土)の第2層があり、第3層の黄褐色粘質土層が地山となり、この層で遺構を確認している。

確認した遺構は、古墳時代後期から中・近世に亘るもので、同一面で各時代の遺構を検出しており複合遺跡と言える。次に各遺構を記す。

1号墳

9トレンチで周溝の1部を確認したため、その後1号墳の全体を把握するため、14トレンチを設定したが、最終的には9トレンチと14トレンチの間の畦を取り外し最終写真を写した。1号墳は、直径13mで巾2m・深さ0.5mの周溝を持つ小円墳であるが、封土は削平されており、黄褐色粘質土層の地山面で周溝等を確認した。この面には、農耕の関係と考えられる近世の溝が多数見受けられ、数条の溝が1号墳を切って走っていた。この様な状況から主体部の存在は予想していなかったのであるが、地山を精査した時点では近世溝と1部この溝に切られた5m×2.5mの長方形の上塙を確認し、近世の溝を掘り込み後、土塙の掘り込みにかかるとした。

上塙は、最初その性格が不明であった為、中央部に畔を残し約5cmの深さで掘り下げた。この作業中、副葬品の須恵器の1部が出土し古墳の主体部である事が確認できた。この為、土塙の中をこの面で精査した所、白色粘土が線状に2条平行して検出できるとともに、その内側に朱が散布していた。この白色粘土と朱の散布状況から木棺がプランとして確認できた。木棺は、側板に木口板を落とす組み合せ式の木棺で、側板全長3.4m

・木口板まで2.7m・巾0.65mを計り、北側の木口板より50cmの所に中仕切の跡と考えられる溝が木棺底で検出された。木棺内部には、ほぼ全面朱が塗られていたらしく、木材の痕跡が朱の塊として確認でき、この木材を固定する為に木棺と土塙の間に白色粘土を詰めていたと考えられる。また、副葬品への朱の付着から見れば蓋板内側にも朱が塗られていたと思われる。副葬品は、南側木口板付近・東側側板中央部・北側木口板と中仕切の間の3ヶ所で出土している。南側木口板付近では、棺内への土砂流入時に若干の移動はあったと思われるが、ほぼ原位置で須恵器が11個体出土した。その内訳は、広口壺4個体・脚付短頸壺・短頸壺・甕各1個体・杯4セットである。このうち、甕は短頸壺の中に入れ子の状態で山上している。棺中央部東側側板付近では鉄製品が副葬されており、鉄刀1本・鉄鎌5本（塊状である為この他にある可能性がある。）・鉄鎌1丁が検出できた。また、中仕切と東側木口板の間には、須恵器杯の蓋と身を伏せた状態で置いていた。

2号墳

12トレンチで確認した「C字状」の周溝状遺構で、残存状態は非常に悪く深さ10cmほどの舟底型の溝である。出土遺物はなく古墳と認められるべきものかどうか微妙な所であるが、同じ12トレンチで古墳時代後期の1号土塙墓を確認した事から2分古墳とした。周溝は、巾1.5m・深さ10cmを計り、直径は8.5mであった。

3号墳

8トレンチで4号墳と切り合った形で確認した古墳で、その後10トレンチ・18トレンチを設定してその全体を確認した。3号墳と4号墳の切り合いは、断面を観察した結果、3号墳を4号墳が切っている事がわかった。3号墳の周溝は、巾4cm・深さ0.8mを計り、直径は16.7mであるが、地山まで削平されており封土は確認できなかった。主体部は、3号墳のはば中央に4.7m×2.7mの土塙が認められ、これを5cmほど掘り下げた所、握り拳ほどの川原石が全面に敷き詰めてあったが、土塙内での遺物の出土はなかった。この遺構は、木棺直葬で土塙底を石敷にしたものとする事も可能であるが、現時点では横穴式石室の削平された遺構と考えている。遺物の出土は周溝の埋土中からのもので、焼成後底部穿穴した須恵器甕1個体・須恵器壺身2個体・壺蓋2個体・金環1個体が出土している。

4号墳

3号墳と同時に8トレンチで1部検出し、その後10トレンチを設定してその全体を確認した古墳である。周溝は、巾1.3m・深さ0.55mを計り、直径は7.7mであったが、この古墳も地山まで削平されており封土は確認できなかった。出土遺物は確認していない。

5号墳

11トレンチで確認したもので、この古墳も地山まで削平されており封土は検出できず、周溝だけが古墳である事が確認できたものである。周溝は、巾3.2m・深さ0.5mを計り、全体の確認はできなかったが、直径はほぼ14mと推定できる。出土遺物は、確認していない。

6号墳

10トレンチで確認した古墳で、中央部に主体部らしき土壤が認められたためにこの掘り込みを行ったが、後世の搅乱であった。この古墳も地山まで削平されており、周溝だけが確認されたもので、周溝は巾3m・深さ0.8mを計り、古墳の直径は11mと推定される。出土遺物は、周溝内で土器の壺1個体が出土している。この出土地点は、周溝底が梢円形に落ち込み、溝内土壤の可能性がある。

7号墳

15トレンチで1部の周溝を確認したために里道の北側に16トレンチを設定し、ほぼ半分以上を検出したものであるが、この古墳も地山まで削平されており、封土は認められなかった。周溝は、巾2m・深さ0.7mを計り、直径はほぼ12mと推定できる。この周溝からの遺物の出土は、須恵器壺蓋・壺の小片が出土している。

8号墳

16トレンチで1部を確認したため、17トレンチを設定しその直径は確認できたが、中央部は土置場としたため、主体部の有無は確認できなかった。この古墳は、16トレンチ

で確認した時点で周溝が砂の詰まった近世の溝で切られており、近世には古墳はすでに地山まで削平されていた事が確認できた。周溝は、5.5m・深さ1mを計り直径20.5mの小円墳であり、周溝からの遺物の出土は土師器長壺・須恵器坏蓋が出土している。

以上、今回の調査で確認した古墳は8基であり、遺物から見て6世紀中葉から7世紀前半にかけての古墳群であり、主体部は木棺直葬と横穴式石室を持つものと考えられるが、大半のものは地山まで削平されていたために確認できなかった。また、この時代の造構は、土壇墓も確認しているので次に記したい。

SK-1 (1号土壇墓)

12トレンチ北側で確認した土壇で、巾1.4m・長さ2.6m・深さ0.65mを計る。遺物は、土壇底の面より浮いた状態で、確認しており、断面等より見て木棺の上に乗せて副葬されていたと考えられる。副葬品は、土壇北側で須恵器高坏1個体・壺2個体・坏蓋3個体・坏身3個体が出土しており、南側で鉄製轡・西側で鉄鐵3本が出土している。このうち、須恵器は、高坏等は焼成良好のものであったが、坏は焼成不良の軟質のものであった。この様に、土壇墓としては比較的多くの副葬品を持っているために、古墳である可能性も考えられる。しかし、その検出状況は、「土壇が検出時で約70cmの深さを持っており多量な地山の削平は考えられないにもかかわらず、古墳の周溝が確認できなかったことより、一応土壇墓と考えている。

SK-2

10トレンチで確認したものでSK-3とほぼ平行して並び、3号墳・4号墳・6号墳のほぼ中間に位置している。土壇は全長2.3m・巾1.2m・深さ0.55mを計り、土壇内よりの遺物の出土は見なかった。

SK-3

前述した様にSK-2とほぼ平行して確認したもので、3号墳に近接して位置する。土壇はSK-2と同様逆台形状の断面をなし、全長1.4m・巾0.7m・深さ0.5mを計る。遺物は底についた形で須恵器坏蓋が出土している。

S K - 5

14トレンチで確認したもので、1号墳に近接して位置している。近世溝に切られていが、土壙は全長2.3m・巾0.8m・深さ0.5mを計り、土壙底に木口板の痕跡が検出できた。このことから、この土壙は、組み合せ式木棺を持った土壙墓で、木口板から想定すれば長さ1.56m・巾0.4mの内法を持った木棺であったと思われる。この木棺内からは西側木口板近くで須恵器坏が1セット重なった形で出土している。

S K - 6

15トレンチで確認した土壙で、1号墳と7号墳の中間に位置しており、朱・白色粘土の検出状況から1号墳主体部との共通性が見られ、木棺を持つ土壙墓と考えた。掘り込みをおこなった所、深さ5cmで木棺底板の痕跡と考えられる土層になり、15cmで土壙の底となることからかなり削平を受けたものと思われる。土壙は全長2.56m・巾13mを計るが、木棺は長さ1.4m・巾0.6mと推定され、土壙の西側に寄った形で置かれていたと思われる。この土壙墓での遺物は、土壙埋上より須恵器坏・高坏と考えられる小片が出士している。

S K - 9

18トレンチ西壁で確認した土壙で、3号墳に近接して位置している。最初約5%を検出したが、その全体を確認するためトレンチを拡張した。土壙は全長2.9m・巾1.8m・深さ0.7mを計り、底は舟底型に近い。この土壙からは、須恵器と鉄製品が出土している。東壁付近では頭部を打ち欠いた壺(体部)と坏2セット、北西側で坏身1個体と鉄鎌が出士している。

以上は、現在土壙墓と考えている土壙であるが、次に遺構を掘り込む時点で性格不明とした土壙を記す。

S X - 1

16トレンチの中央部で確認した土壙で、7m×75mの不整形な方形プランを持つもの

である。この土壙は、北端を巾2.5mほどの砂の詰まった近世の溝に切られていた。プランで確認した時点での土壙の切り合いは不明であったため、断面を残し四分割して掘り込んだが、この結果、7m×7mの方形土壙があり、その後長軸4.8mの梢円形プランの土壙が掘られたと考えられる。方形プランの埋土の中には、中世の灰釉陶器・土師質小皿・糞の入った焼けた粘土(壁片か)・灰等が詰まっていた。また、梢円形プランの土壙では、馬の頭骨と思われる頸骨が検出でき、この他には土師質小皿が入っていた。このことから一応この土壙を中世の祭祀にかかわって作られたものと考えている。

S X - 5

12トレンチ北端で確認したもので、不整形なプランで溝が走る等性格は不明である。遺物は土師器甕他小片であった。

以上、古墳時代後期の土壙墓は6基上げられるが、この他可能性があるものとしては、10トレンチで3号墳と6号墳の間で検出した、1.5m×0.8mの土壙が上げられる。しかし、遺物の出土はなかったため一応除外した。

掘立柱建物群は、調査地北側の地域12・13・19・20トレンチで検出している。遺物は、包含層からしか出土していないため、遺構の確実な時期決定はできなかつた。また、包含層の遺物も小片であるため、今回は図示していないが、須恵器壺蓋等奈良時代におさまるものであると考えている。ただし、遺構の関係上、古墳時代後期の遺物は包含層に入っている。

S B - 1

12トレンチ東側でS B-2と並んだ形で検出した2間×2間の建物跡である。主軸はN-5°-Eで、南北向きが1.8m、東西向きが2mの柱間を持ち、柱穴はほぼ方形をなし、最大のものは一辺40cmを計る。

S B - 2

S B-1と雁行して主軸も平行するもので、同時期のものと考えられる3間×3間の建物である。主軸はN-7°-Eで、柱間は1.8m前後を示し、柱穴は方形の掘り方を持ち、

最大のものは一辺50cmである。

S B - 3

S B - 2 の北側で確認したもので、全体は確認できなかったが、1間×2間以上の建物跡である。主軸はN-37-Eで、柱間は2.7mを計り、柱穴は円形で最大のものは直径30cmである。

S B - 4

12トレンチ西側端で確認したもので、他の建物跡と比較すれば柱穴掘り方は大きく、2間×4間以上の規模を持つ。主軸はN-16-Wで、柱間は2.1m前後を計り、柱穴は一辺1m前後の方形の掘り方を持つものである。

S B - 5

20トレンチ中央部で確認したもので、S B - 6と平行している2間×2間以上の建物である。梁行と考えられる所に柱穴があるので2棟である可能性もあるが、現時点では1棟として報告しておく。主軸はN-69-Eで柱間は2.5mを計り、柱穴は長軸1mの不整形な梢円形の掘り方を持つ。

S B - 6

20トレンチ北側で確認した2間×2間以上の建物跡で、前述した様にS B - 5と平行して存在する事により同時期のものであると考えられる。主軸はN-26-Eで柱間25mを計り、柱穴は一辺1m前後の方形の掘り方を持つ。

S B - 7

19トレンチ南側でS B - 8と切り合った形で確認したものである。主軸はN-30-Wで、柱間2.3mを計り、柱穴は直径50cmほどの不整形な円形をなす2間×3間以上の建物跡である。

S B - 8

S B - 7 と同一の主軸をなす 2 間 × 3 間以上の建物である。柱間は 2.2m 前後を計り、柱穴は一辺 50cm ほどの不整形な方形の掘り方を持つ。

S B - 9

13 トレンチ南端で確認した 1 間 × 2 間以上の建物跡で、主軸は N - 9° - E である。柱間は東西 2.5m 、南北 3 m を計り、柱穴は 40cm 前後の円形をなす。

S B - 10

S B - 9 の北側で確認した 1 間 × 2 間以上の建物跡で、主軸は N - 28° - W である。柱間は東西方向 3.7m 、南北方向 4.6m を計り、柱穴は直径 40cm の円形をなす。

S B - 11

S B - 10 の西側で確認した 1 間 × 2 間以上の建物跡で、主軸は N - 19° - W である。柱間は 2.5m を計り、柱穴は直径 50cm 前後の円形をなす。

S B - 12

S B - 10 と切り合った形で確認した 1 間 × 1 間以上の建物跡で、主軸は N - 68° - E である。柱間は東西方向 4 m 、南北方向 4.5m で、柱穴は 80cm 前後の円形の掘り方を持つ。

S B - 13

S B - 12 とほぼ平行する 1 間 × 4 間以上の建物跡で、主軸は N - 21 - W である。柱間は東西方向 4 m 、南北方向 2.2m を計り、柱穴は直径 70cm 前後の円形の掘り方を持つ。

13トレンチ北端でS B-13と平行する形で確認したものであるが、一列の柱穴だけであり、建物跡か柵跡かは不明である。柱間は1.5m前後を計り、柱穴は50cmほどの不整形な方形であった。

以上調査地北側の遺構群で確認した掘立柱建物群の検出状況を述べてきたが、建物群は主軸の方向や、切り合い状況からみて、すくなくとも4時期に及ぶ遺構であると考えられる。

この他、各トレンチで中近世のピット・溝等を確認しているが、ピットはその性格が不明である。溝は、農耕に関係するものと考えられるが、性格を明らかにする事はできなかった。

3. ま　と　め

調査結果で記した様に、葛籠北遺跡は古墳時代後期から近世に及ぶ複合遺跡である。遺構の性格も古墳時代後期は墓域・奈良時代は集落・中世は祭祀遺構・それ以降は農耕関係の構等と考えられ、土地利用の形態が時間をおって考えられる良好な資料である。以下、「2. 調査の結果」と重複するが、調査結果をまとめて問題点を考えてみたい。

(1)

本調査で確認できた古墳および土壙墓は、その山上遺物より6世紀中葉から7世紀前半までのものと考えられる。

(2)

上記の遺構は、平地における後期群集墳の1形態と考えられるが、土壙墓が混って存在する事が注目される。

(3)

2号墳・1号土壙墓は、群集墳で言われる支群が別のものとして考えることが可能であろう。

(4)

1号墳は保存状態が非常に良く、木棺に朱を塗り、白色粘土で木棺を固定する等々この時代の葬制を知る上で良好な資料である。

(5)

2号墳1号土壙墓のある北の地域は奈良時代以降には、掘立柱建物群が存在する事が集落化したと思われる。掘立柱建物群は、13棟確認しており、主軸・切り合い等より少なくとも4期におよぶものと考えられる。

(6)

古墳の中心地域と考えられる南の地域では、中世に祭祀遺構と考えられる土壙が作られ、断面で見る限り3期の切り合いが確認できた。この中には、焼土・土師器小皿・山茶碗・馬の頭部と思われる頭骨等が入っていた。ちなみに、1号古墳と隣接する所は八幡神社の御旅所となっている。

以上調査結果を列記したわけであるが、今回の調査結果で考えなければならない問題は、古墳時代後期の遺構の存在形態であろう。すなわち小円墳の周辺に土壙墓が配される事や1号墳・土壙墓で確認できた組み合せ式木棺等は、弥生時代からの伝統的葬制と言えるだろう。つまり、方形周溝墓と言われる葬制との類似性が極めて強い事がうかが

われるのである。また、小円墳・小方墳に木棺を直葬する墓制はプレ群集墳と言われる5世紀代の尾根上に立地する古墳群に見られるものである。

この様に見てくると、今回の調査で確認した古墳群は、弥生時代から続く周溝墓の系譜に続くものであると見る事も可能であろう。ここで、1つの問題になるのは、横穴式石室を持つ小古墳等と質的な相異があるかどうかと言う事である。つまり、古墳時代の周溝墓と小古墳が同一のものなのかどうかと言う事である。最近、平地で埋没もしくは削平された後期の小古墳の調査例が増加しており、後期群集墳の1つの形態として注目する必要があるだろうし、また今後丘陵に立地して作成される小古墳+横穴式石室の形態と平地+木棺直葬墳の質的な違いがあるのかどうかを検討する必要があるだろう。

4. 出土遺物観察表

番号	種類 器形	法量	形態	調査	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器 壺	口径19.4 器高26.4	○ 口縁部は、しまった頭部よりラグ状に開き脚部を屈曲させて上方に曲げ、2条の凸溝で区画され下方に施文を入れる。 ○ 体部は、ほぼ球形を成し、底部は、丸底にする。	○ 頭部から口縁部は横ナデ調整。 ○ 体部は、叩き調整後、外面上半部をカキ目調整。	胎土：良好 色調：黒灰褐色 焼成：硬	14T 1号墳 主体部内 (1号から。)
2	須恵器 壺	口径17.6 器高25.2	"	"	"	"
3	須恵器 壺	口径14.1 器高17.4	○ 口縁部は、あまりしまらない頭部より外彎して開き端部を屈曲させて上方に曲み上げ丸くおさめる。 ○ 体部は、上下にやや長い球形を成し、底部は、丸底にする。	○ 口縁部は、横ナデ調整で、外面をカキ目調整で、仕上げる。 ○ 体部は、上半部分ナデ調整後、外面をカキ目調整し、下半部は叩き調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	14T 1号墳 主体部内
4	須恵器 壺	口径13.8 器高18.2	"	"	"	"
5	須恵器 脚付短颈壺	口径7.3 器高14.8	○ 口縁部は、直立して脚部を丸くおさめる。 ○ 体部は、やや肩平な球形を成し、中央部上面に施文工具による刻み、下面にカキ目を入れる。 ○ 脚部は、やや内側して開き3穴を穿つ。	○ 口縁部、体部、脚部ともに横ナデ調整。	胎土：良好 色調：青灰色 焼成：硬	"
6	須恵器 短颈壺	口径9 器高7.9	○ 口縁部は、やや内傾して立ち上がり、脚部前面に強烈な凹溝を入れる。 ○ 体部は、扁平な球形をなし、底部は、丸底にする。	○ 口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、内外面ともに横ナデ調整。	"	"
7	須恵器 壺	口径10.6 器高11	○ 口縁部は、しまった頭部よりロート状に開き、上方に立ち上がり出している。口縁部全面に施文を入れる。 ○ 体部は、球形を成し、中央部を凹溝で区画し、脚部は丸底を作り、底部は丸底にする。	○ 口縁部は、横ナデ調整。 ○ 体部は、横ナデ調整であるが、底部は叩き調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	"

番号	種類	器形	法量	形	態	調	整	胎土・色調・焼成	備考
8	須恵器 坏	蓋口径14.6 身口径13		○ 蓋部は、扁平なドーム状をなし、口縁部は外反きみに開き天井部内面に叩き痕を入れる。 ○ 身は、内弯して開く体部から内傾して立ち上がる掛け瓶を作る。	○ 蓋部は、横ナデ調整で、天井部外面は、ヘラ切り不調整。天井部内部には叩き痕を残す。 ○ 身は、横ナデ調整で、底部にはヘラ切り不調整。	胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	14T 1号焼 主体部内		
9	須恵器 坏	蓋口径14.2 器高 5.1		○ 蓋部は、扁平なドーム状をなす天井部と掛け部の間に、巾掛け部があり、内弯して垂下するには凹縫を入れる。 ○ 身部は、扁平なドーム状をなす体部より端部を丸くおさめる。	○ 蓋部は、体部内外面ともに横ナデ調整で、天井部外面はヘラ切り不調整。天井部内部には叩き痕が残る。 ○ 身部は、体部内外面ともに横ナデ調整で、天井部外面はヘラ切り不調整。底部内面には叩き痕が残る。	胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	n		
10	須恵器 坏	蓋口径13 身口径13 器高 4.8		○ 蓋部は、扁平なドーム状をなす天井部と掛け部の間に、巾掛け部を入れ、内弯して垂下するには凹縫を入れる。 ○ 身部は、扁平なドーム状をなす体部より立ち上がり、端部を丸くおさめる。	○ 蓋部は、天井部外面はヘラ切り不調整して、天井部内部には叩き痕を入れる。 ○ 身部は、内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	n		
11	須恵器 坏	蓋口径14.5 器高 4.7 身口径13 器高 5		○ 蓋部は、扁平なドーム状をなす天井部と掛け部の間に、巾掛け部を入れ、内弯して垂下し、端部を丸くおさめる。 ○ 身部は、扁平なドーム状をなす体部より立ち上がり、端部を丸くおさめる。	○ 蓋部は、天井部外面はヘラ切り不調整して、天井部内部には叩き痕を入れる。 ○ 身部は、内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	n		
12	須恵器 坏	蓋口径14.8 器高 5 身口径13.2 器高 5.1				胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	n		
13	須恵器 坏	蓋口径14.8 器高 4.3 身口径13 器高 4.7			○ 蓋部は、天井部外面はヘラ切り不調整で、天井部内部はヘラ切り不調整。 ○ 身部は、天井部外面はヘラ切り不調整で、底部外面はヘラ切り不調整。	胎土 良好 色調 焼成 灰 硬	SK-5 n		

番号	種類	器形	法量	形態	調査	胎土・色調・焼成	備考
14	須恵器 直口壺	口径9.9 器高14.6	○ 口縁部は、直立し、凹線で区切られた カキ目を入れ、端部を丸くおさめる。 ○ 体部は、やや肩が張り、蝶形に作られ、 上半部にカキ目を入れ、下半部は3条の 弱い凸線を走らせる。 ○ 底部は、丸底に作る。	○ 口縁部は横ナデ調整。 ○ 体部は横ナデ調整。後下面下半分をへ ラ削り調整。	○ 口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、下半部に凹線を残し、底部外面 はへラ切り不調整である。	胎土：良好 色調：黒灰色 焼成：軟	SK-1
15	須恵器 縫頸壺	口径6.4 器高15.5	○ 口縁は弱く外傾して立ち上がり、端部 を外反させなくて丸くおさめる。 ○ 中位部に1条の凸線を作る。 ○ 体部は肩の張らない蝶形をなし、肩部 に2条中位部より下に6条の弱い山線を 入れる。 ○ 底部は丸底に作られる。	○ 口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、下半部に凹線を残し、底部外面 はへラ切り不調整である。	○ 口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、下半部に凹線を残し、底部外面 はへラ切り不調整である。	胎土：良好 色調：黒灰色 焼成：軟	n
16	須恵器 高 壱	口径13 器高13.4	○ 环部は内傾して立ち上がり、端部を入れる。 ○ 脚部は、ラシン状に開き、端部を面取 りしておさめる。中位部に1条の凸線を 入れ、上下にカキ目を入れる。	○ 环部・脚部ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、横ナデ調整で天井部外面は、 へラ切り不調整。	○ 环部・脚部ともに横ナデ調整。 ○ 体部は、横ナデ調整で天井部外面は、 へラ切り不調整。	胎土：良好 色調：黒灰色 焼成：軟	n
17	須恵器 壹 壱	口径12.6 器高(4.3)	○ 口縁は外傾して垂下する。	○ 口縁部は、横ナデ調整で天井部外面は、 へラ切り不調整。	○ 口縁部は、横ナデ調整で天井部外面は、 へラ切り不調整。	胎土：良好 色調：黒灰色 焼成：軟	n
18	須恵器 壹 壱	口径12.3 器高 4.2	n	n	n	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟	n
19	須恵器 壹 壱	口径12.3 器高 3.6	n	n	n	胎土：良好 色調：黒灰色 焼成：軟	n
20	須恵器 壹 壱	口径11.2 器高(4.4)	○ 体部は直線的に開き、掛け脚は、内傾 して立ち上がる。 ○ 底部は平らな底をなす。	○ 体部は内外底ともに横ナデ調整で、底 部外面はへラ切り調整。	○ 体部は内外底ともに横ナデ調整で、底 部外面はへラ切り調整。	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟	n
21	須恵器 壹 身	口径11.1 器高 3.6	n	n	n	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟	n
22	須恵器 壹 身	口径 9.9 器高 3.6	n	n	n	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：軟	n

番号	種類	形 状	法 量	形 態	調 整	整 整	胎	胎土・色調・焼成	備 考
23	土器 長 甕	口径17.2 器高5.1	○ 口縁部は「く」の字状をなし、端部を 面取る。 ○ 体部は、肩が張らず幅円形をなすと想 われる。	○ 体部外面は内外面とともに焼ナデ調整。 ○ 体部外面は、ハケ調整で内部は不明。	胎土：若干の砂 色調：輪を含む 焼成：軟	S X-5			
24	須恵器 盆	口径15.1 器高4.6	○ 体部は、やや肩の低いた線形をなし、 底部を丸くおさめる。	○ 体部は、内外面とともに焼ナデ調整で、 外面下半部はヘラ削り調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	S K-9			
25	須恵器 杯	口径15.1 器高4.6	○ 楔半なドーム状をなす天井部と掛け脚 の間に凹隙を入れ、脚部を強くナデするため内部が凹 だ。	○ 体部は内外面相手ナデ調整で、天井部外 面はヘラ切り不調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	"			
26	須恵器 杯	口径14.1 器高4		"	"	"			
27	須恵器 折 身	口径13.5 器高5.1	○ 体部は内窪して開き、受け脚は直線的 に立ち上がる。	○ 体部は、内外面ともに焼ナデ調整で、 底部外面はヘラ切り不調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	"			
28	須恵器 折 身	口径13 器高4.8		"	"	"			
29	須恵器 折 身	口径12.3 器高4.1		"	"	"			
30	須恵器 杯	口径14.7 器高4.8	○ 口平な天井部より掛け脚との間に凹陥 を作り、掛け脚はやや外反して脚取りする。 ○ 端部内部を強いナデによって調整する。	○ 体部は、内外面ともに焼ナデ調整で、 天井部外面はヘラ切り不調整。	"	S K-3			
31	須恵器 甕	口径8.2 器高31.2	○ 口縁部は、外弯して開き、端部を直曲 させて、丸くおさめる。 ○ 体部は、球形に作り、外腹脇部および 叩き目はカキ目を入れる。 ○ 底部は焼成後穿孔している。	○ 頸部および口縁部は、内外面ともに焼 ナデ調整。 ○ 体部は、外面平行線・内部背面透文の 叩き目調整。外面は叩き目調整をほどこす。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	3号墳 周溝内			
32	須恵器 杯	口径13.1 器高4.6	○ 幅平なドーム状をなす天井部より掛け 脚は直線的に下がり、端部内部に段をつ ける。	○ 体部は内外面ともに焼ナデ調整で、天 井部外面はヘラ切り不調整。	"	"			

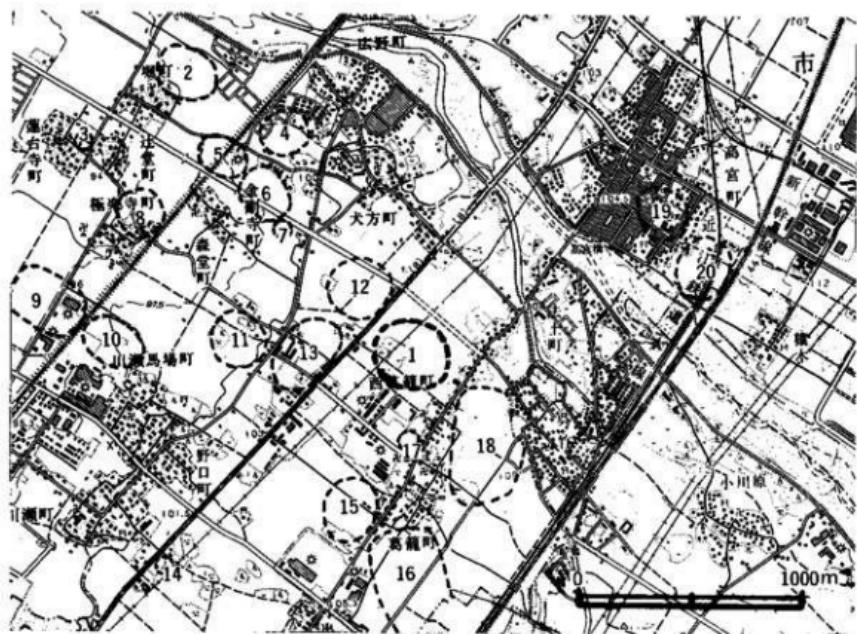
番号	種類	形	量	性	調	整	胎土・色調・焼成	備考
33	須恵器 壺 蓋	口径9.6 器高3.5	○ドーム状の天井部より掛け部は外傾し て開き端部を丸くおさめる。	○体部は、内外面ともに焼ナデ調整で、 天井部外面は、ヘラ切り不調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃灰色 強	3号埴 周溝内	-
34	須恵器 壺 身	口径12.3 器高5.1	○体部は内凹して開き、受け部は内側に 立てら上がり、端部を丸くおさめる。	○体部は、内外面ともに焼ナデ調整で、 底部外面はヘラ切り不調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃青灰色 強	4号埴 周溝内	-
35	須恵器 壺 身	口径12.2 器高4.9	○	○体部は内外面ともに焼ナデ調整で、底 部外面はヘラ切り不調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃灰色 強	5号埴 周溝内	-
36	土師器 壺 身	口径17.7 器高35.2	○口縁部は「く」の字状に開き、端部を 面取りしておさめる。 ○体部は長楕円形をなし、最大體径は、 中位部より下にあり、底部は丸底に作る。	○口縁部は、内外面ともに焼ナデ調整。 ○体部は外面ハケ調整で、内面ナデ上げ 調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃黄色 強	18T 包含層	-
37	土師器 壺 長 身	口径21.7	○口縁部は「く」の字状を下方にひねつて丸 くおさめる。 ○体部は長楕円形をなす。	○口縁部は、内外面ともに焼ナデ調整。 ○体部は外面ハケ調整で、内面ナデ上げ 調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃赤色 強	6号埴 周溝内	-
38	土師器 壺	口径15.7 器高22.8	○口縁部は外張しながら開き、端部外面 をナデするため焼け作形をなし、 体部は脛が張らざりやすい。 ○低筋は丸底に作られる。	○頭部・口縁部は外面ハケ調整で、内面は 筋が張らざりやすい。 ○体部は外面ハケ調整とあるがナデ調整。 ○筋のため不明であるがナデ調整と見られる。	胎土: 色調: 焼成:	良好 茶褐色 やや軟	6号埴 周溝内	-
39	土師器 壺 長	口径18.2	○口縁部は「く」の字状に開き、端部を 丸くおさめる。 ○体部は脛が張らず丸底に作る長楕円形をなす。	○口縁部は、内面ハケ調整で、外バケ調整 後焼ナデ調整。 ○体部は、外バケ調整で、内面ナデ調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 茶褐色 やや軟	8号埴 周溝内	-
40	須恵器 壺 身	口径14.8 器高(52)	○扁平なドーム状をなす天井部と掛け部 の間に弱い凹線があり掛け部は、直線的 に裏下し端部を外側にややひねり出し 丸くおさめる。	○体部は、内外面ともに焼ナデ調整で、天 井部外面はヘラ削り調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 濃灰色 強	胎土: 色調: 焼成:	良好 自灰色 強
41	山茶輪 柄	口径14.2 器高5	○体部は、内湾きみに開き、口縁部をや や外側に開き、端部を丸くおさめる。 ○高台は、やや小さな張り付高台でもみ 痕を残す。	○体部、高台ともにロクロナデ調整。	胎土: 色調: 焼成:	良好 自灰色 強	SK-7	-
42	鉢 刀	全长71.1	○刃渡り58.4cmの直刀で、本質の變化に よる付着が多い地金はありません。 ○茎部に目釘穴を2穴有する。	-	胎土: 色調: 焼成:	良好 自灰色 強	1号埴 主体部	-

番号	種類	器皿	法蓋	形態	施	調整	胎土・色調・焼成	備考
43	鉄 錫	全長15.5	○ 柄の部分は、端部をほぼ直角に折り曲げてあり、木質が露出して1部残る。					1号壇 主体部
44	鉄 錫	全長11.5	○ 端部にはほぼ4.5cmで茎は四角に作られ、 口巻部には桺の施皮と思われるものが、 残つていた。					"
45	鉄 錫	" 10.7						
46	鉄 錫	" 6.5	○ 46は3本の錫が接着している。					
47	鉄 錫	全長 8.5	○ 口巻は桺の樹皮と思われるものが残り、 茎は断面四角形をなす。					
48	鉄 錫	" 8.2						
49	鉄 錫	" 6.3	○ 47は、茎と思われる部分が残存。					
50	管		○ 嘴は平鐵板に接着している。側板には 面感と手縫を着ける金具がついている。					
51	鉄 錫	全长 9.8	○ 錫は平鐵の大型のものである。					
52	鉄 錫	" 7.2	○ 茎は断面四角型をなす。					"
53	鉄 錫	" 5.8						
54	鉄 錫	全長12.3	○ 柄部端をほぼ直角に折り曲げている。					SK-9
55	金 管	直径 3.3	○ 地金は脚と思われ、断面円形の「C」 字状の地金に部分的に金が残る。					3号壇 崩壊内

5. 断面図土色表

1号墳 主体部	各古墳周溝、土壤 (図版9)
1 黒灰褐色粘土質土	1 耕土
2 黒灰褐色粘質土 (黄褐色の地山ブロック混入)	2 床土
3 黒褐色粘質土 (黄褐色の地山ブロック混入)	3 暗茶褐色粘質土
4 黒褐色粘質土	4 暗灰褐色粘質土
5 2と同じ	5 暗灰褐色粘質土+地山ブロック
6 暗黒灰褐色粘質土 (黄褐色の地山ブロック混入)	6 暗灰茶色粘質土
7 黄褐色の地山に黒褐色粘質土混入 (水銀朱混入)	7 暗灰茶色粘質土+地山ブロック
8 黒褐色粘質土	8 明茶褐色粘質土
9 淡黒褐色粘質土	9 明茶灰色粘質土
10 黄褐色粘質土+黒褐色粘質土のブロック状混入	10 茶灰色粘質土 (珪混)
11 12に10が混入	11 茶灰色粘質土
12 暗黒褐色粘質土にベースが小ブロック状混入	12 茶灰色粘質土 (砂混)
13 ベース	13 暗灰茶色砂
SK-1	14 淡灰褐色粘質土
1 茶褐色粘質土	15 暗茶灰色粘質土
2 暗褐茶色粘質土	16 暗茶灰色粘質土 (珪混)
3 褐茶色粘質土	17 灰褐色粘質土
4 黄茶色粘質土	18 暗茶灰色粘質土+地山ブロック
5 6よりは7の混入少ない	19 茶褐色粘質土
6 4をベースにして7がブロック状に混入	20 暗茶褐色粘質土+地山ブロック
7 極黄色粘質土	21 灰茶色粘質土
地山、黄褐色粘質土	22 淡黄茶色粘質土
SK-6	23 淡茶灰色粘質土
1 暗茶灰色粘質土	24 暗茶色粘質土
2 明茶灰色粘質土	25 濃灰茶色粘質土
3 灰茶色粘質土	26 濃暗茶色砂泥
4 淡茶色粘質土	27 暗灰茶色砂泥+地山流れ込み
5 3と同じ	28 極灰色粘質土
6 淡茶灰色粘質土	29 ベース
7 暗灰茶色粘質土 (白色粘土少し混入)	30 濃茶灰色粘質土 (砂混)
8 淡灰色粘質土	
9 暗灰色粘質土 (矽材)	

図 版

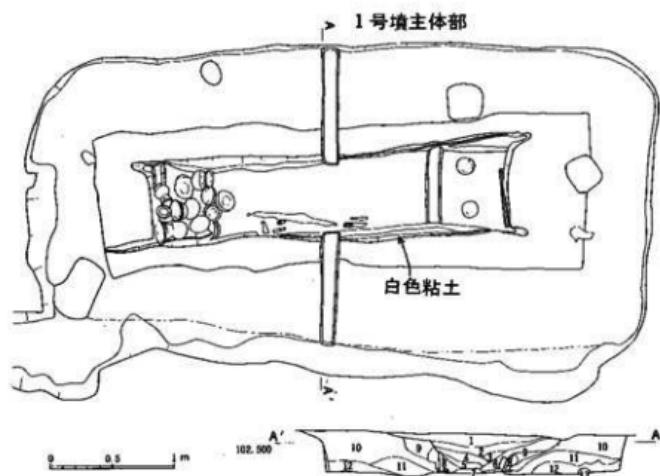
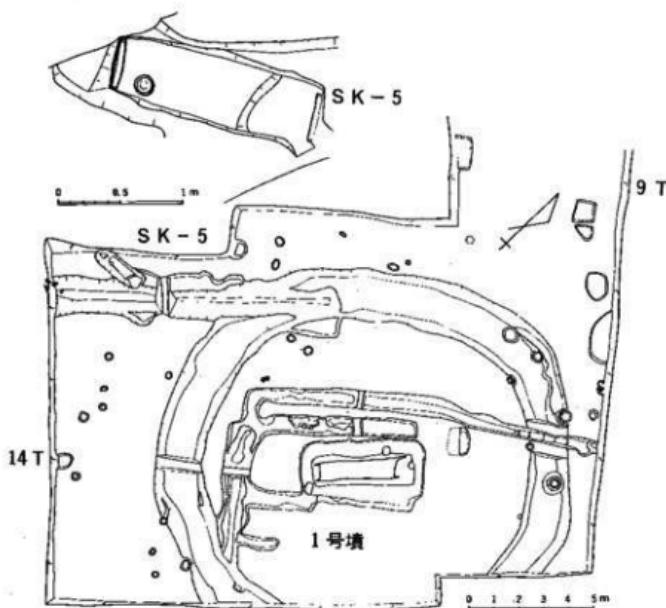


図版 1. 調査地点と周辺の遺跡

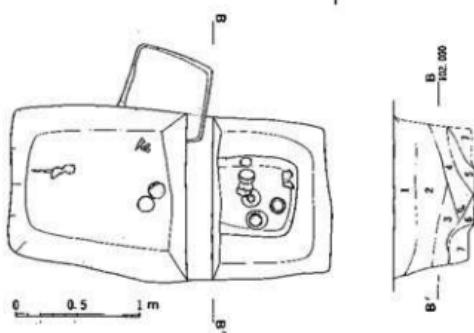
1 葛籠北遺跡(今回調査地)	11 天田遺跡
2 門田遺跡	12 段ノ東遺跡
3 蓼台寺遺跡	13 極楽寺遺跡
4 横地遺跡	14 南川瀬遺跡
5 石原遺跡	15 南川瀬南遺跡
6 堀南遺跡	16 葛籠南遺跡
7 神ノ木遺跡	17 西葛籠遺跡
8 辻ノ東遺跡	18 法師南遺跡
9 杉田遺跡	19 高宮城跡
10 西海道遺跡	20 カットリ遺跡



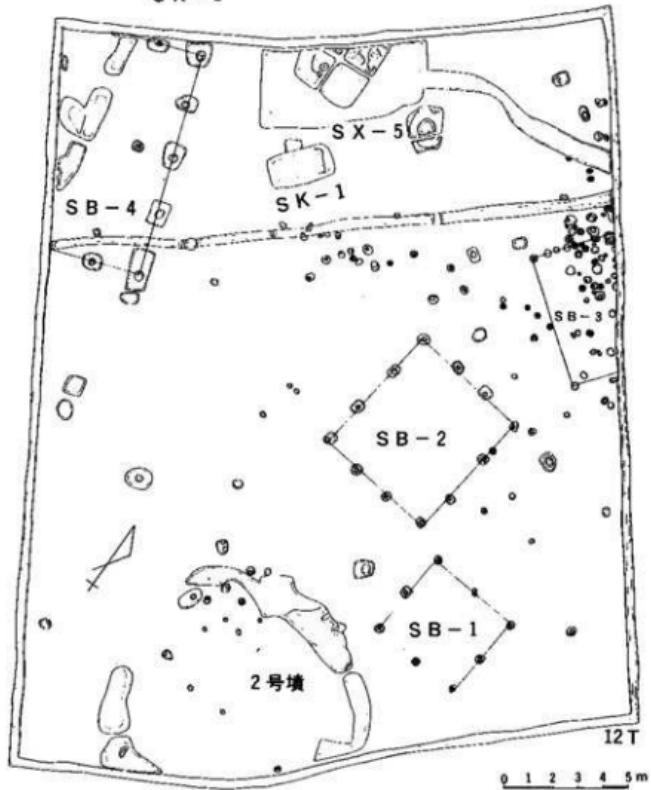
図版2 葛籠北遺跡トレンチ配置図



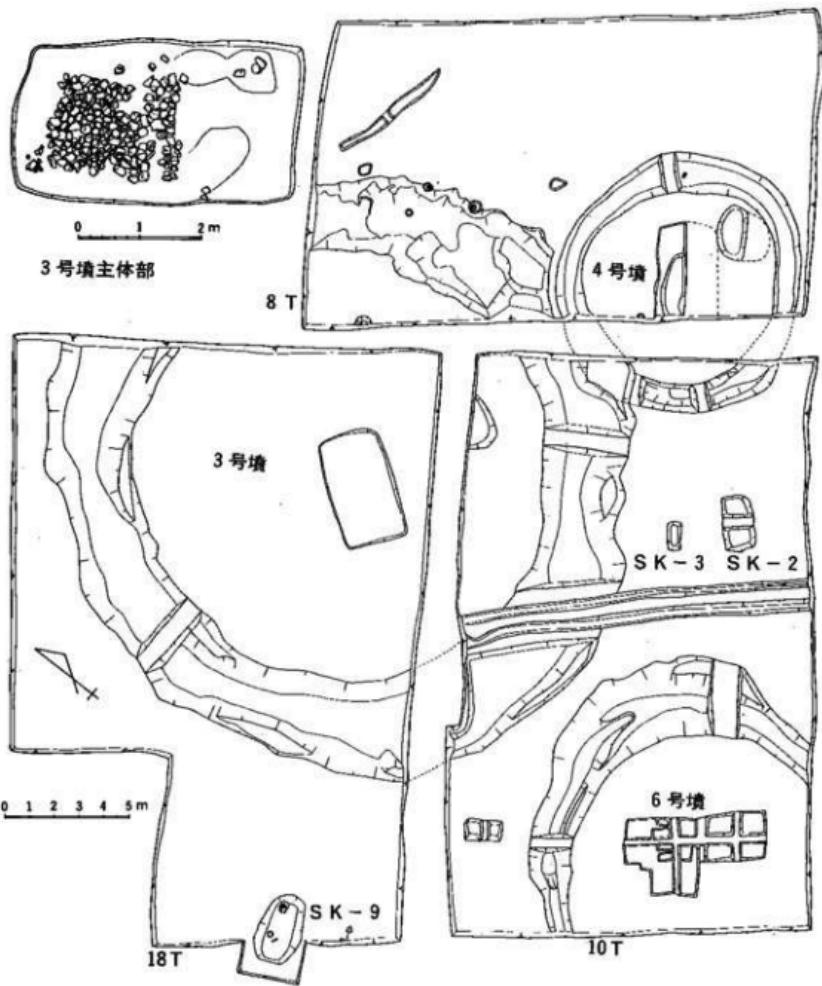
図版3 9T, 14T遺構図 1号墳及びSK-5実測図



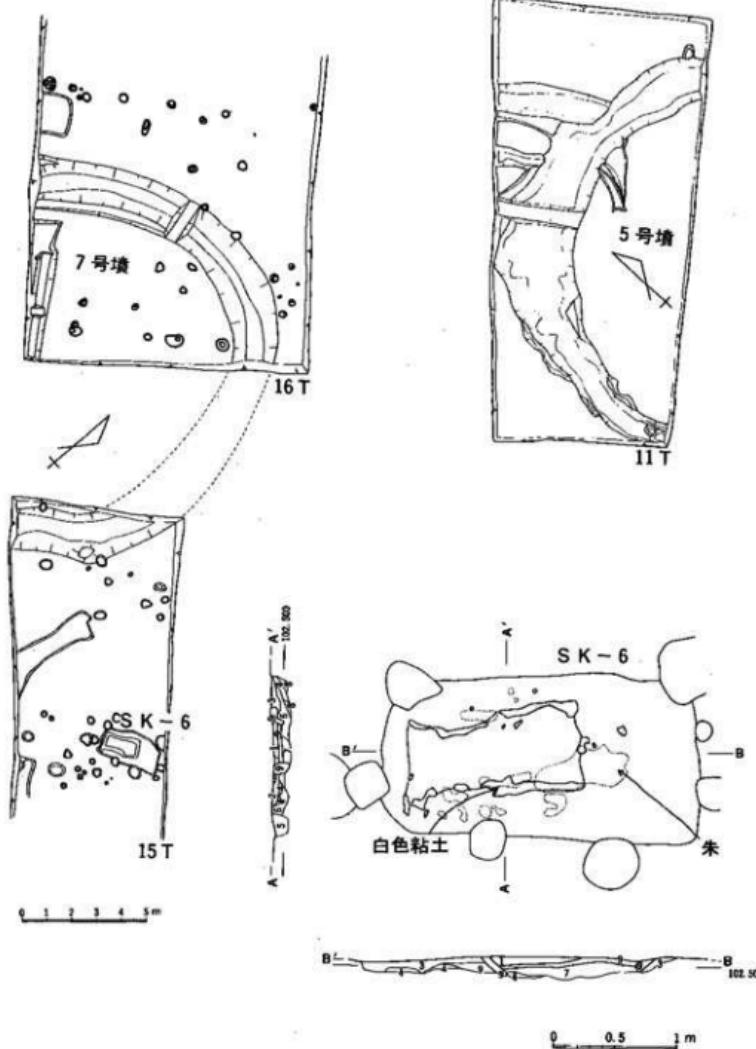
SK - 1



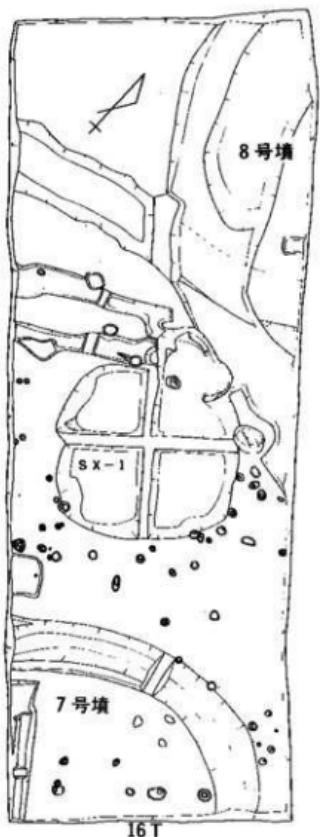
図版4 12T遺構図 SK-1実測図



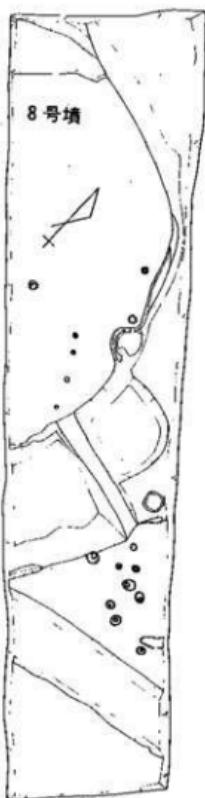
図版5 8T, 10T, 18T造構図 3, 4, 6号墳及び3号墳主体部実測図



図版6 11T.15T.16T遺構図 5号墳・7号墳・SK-6実測図



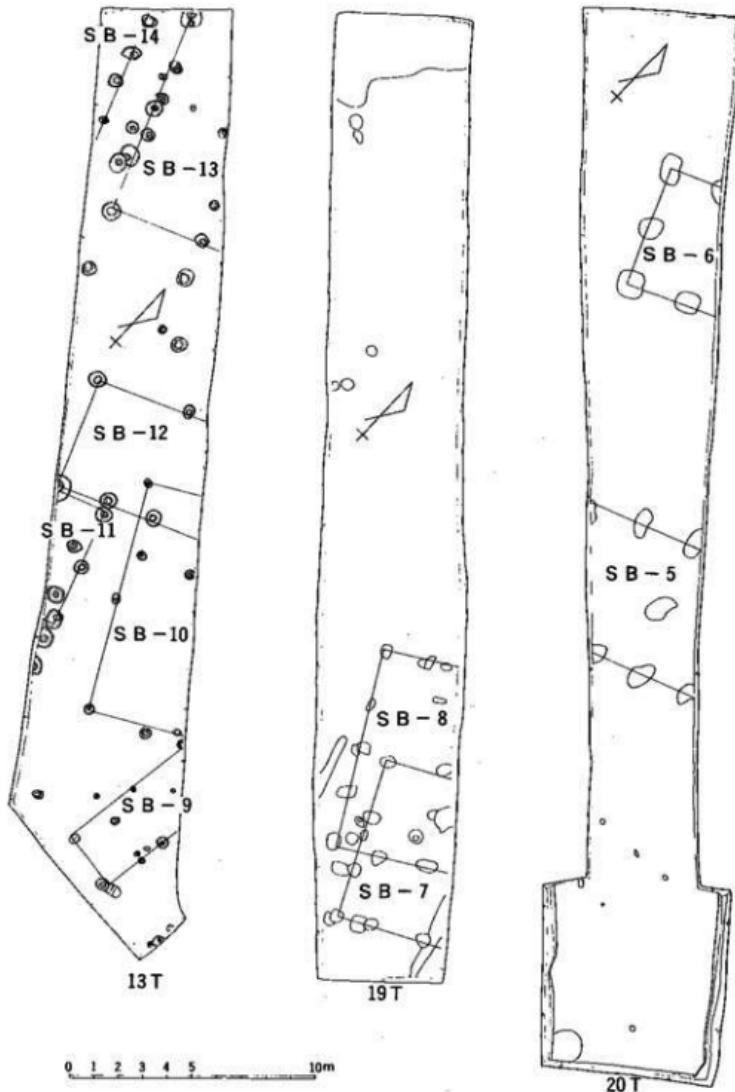
16T



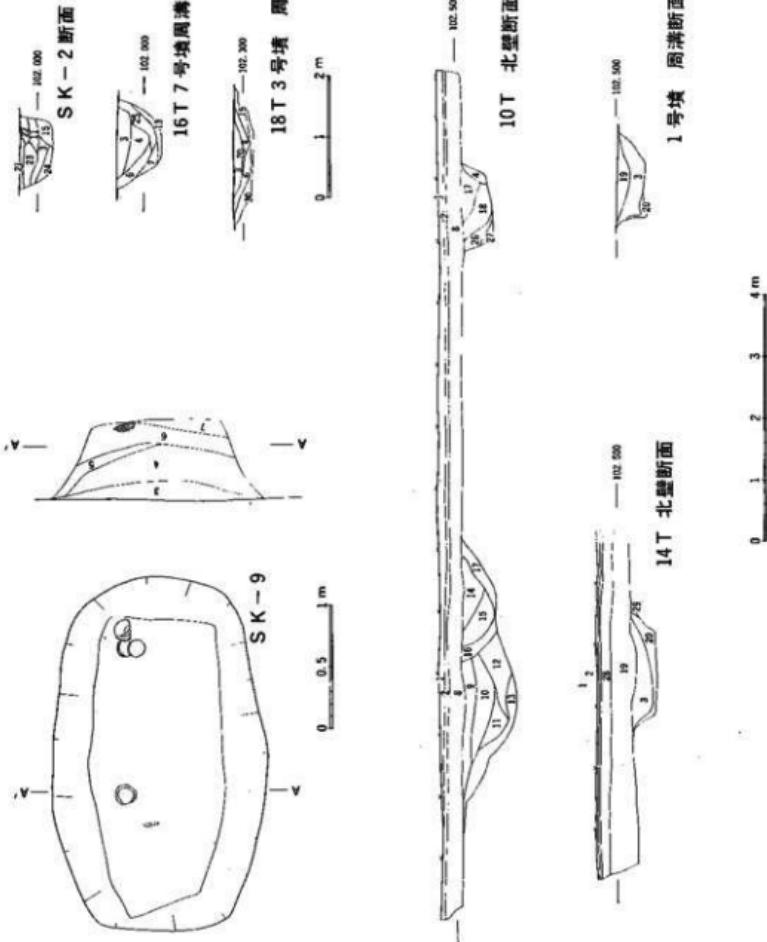
17T

0 1 2 3 4 5m

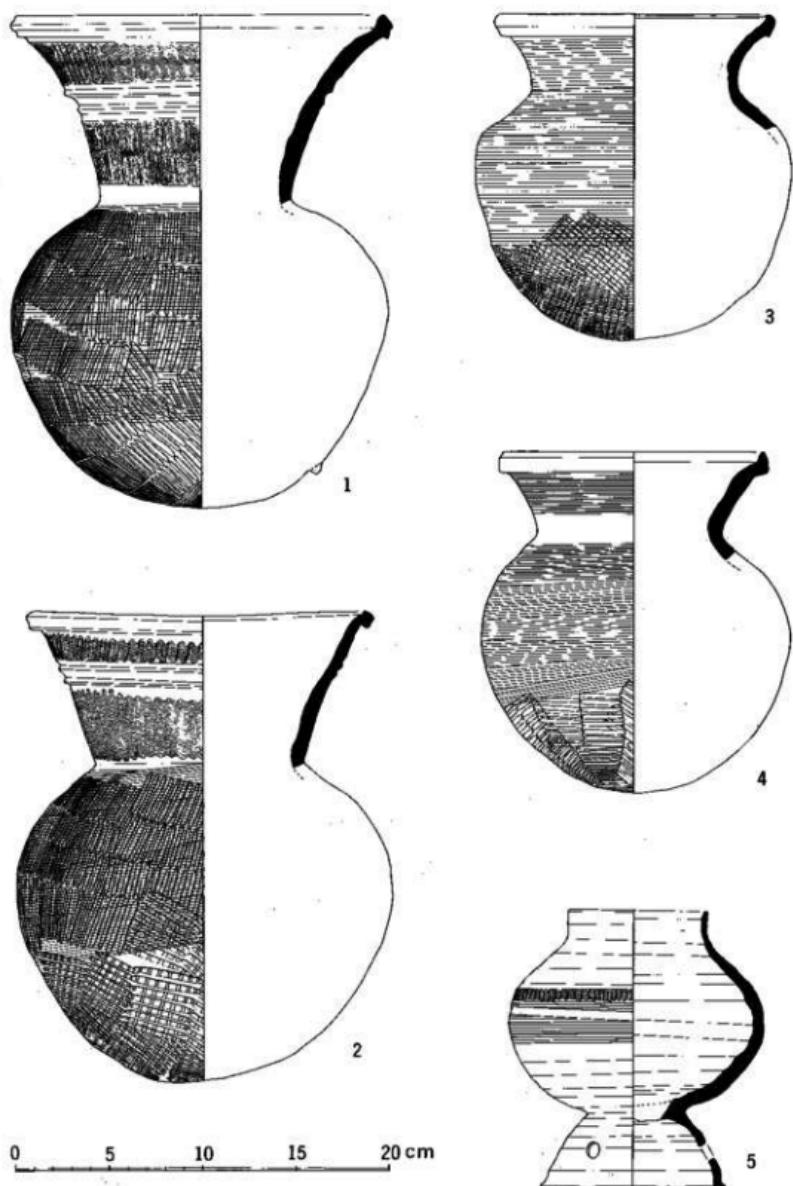
図版7 16T, 17T遺構図



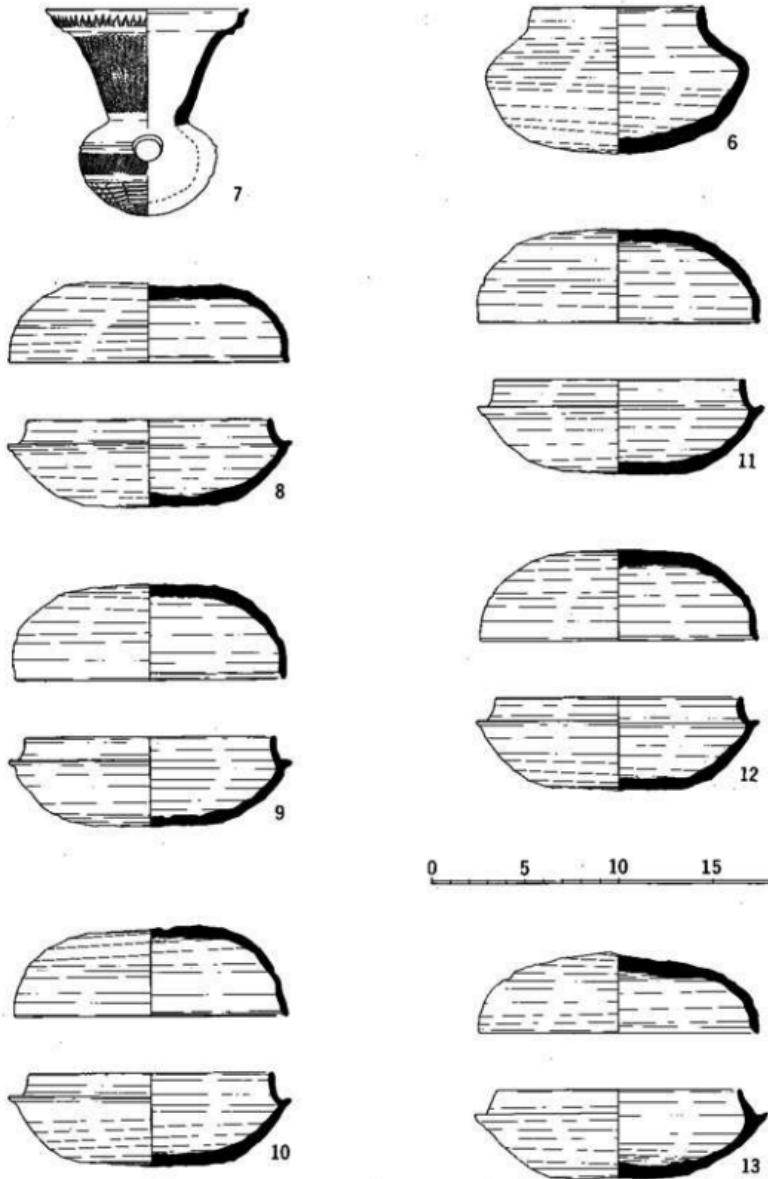
図版8 13T, 19T, 20T遺構図



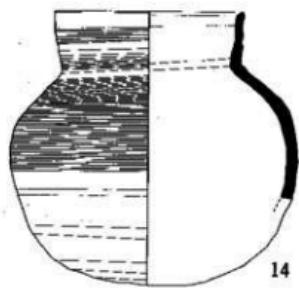
図版9 SK-9実測図 古墳周溝・土塙断面図



图版10 1号墳主体部出土遺物実測図



图版11 1号墳主体部・SK-5出土遺物実測図



14



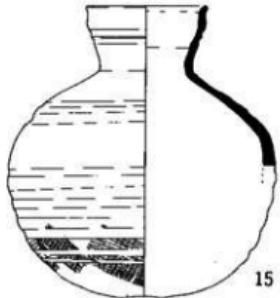
17



18



19



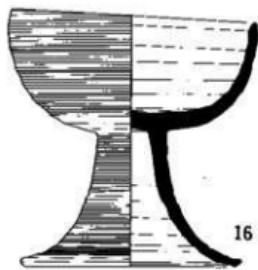
15



20



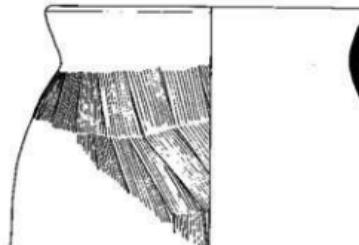
21



16



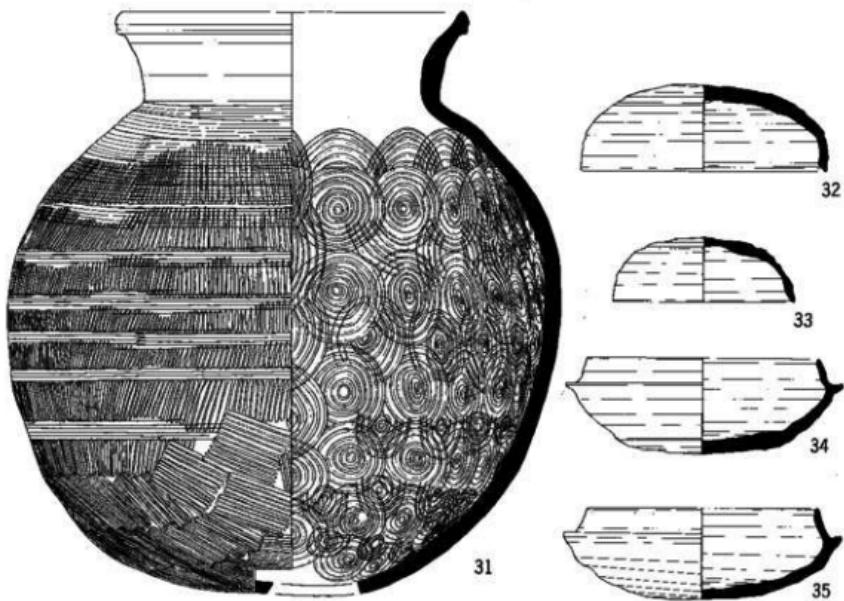
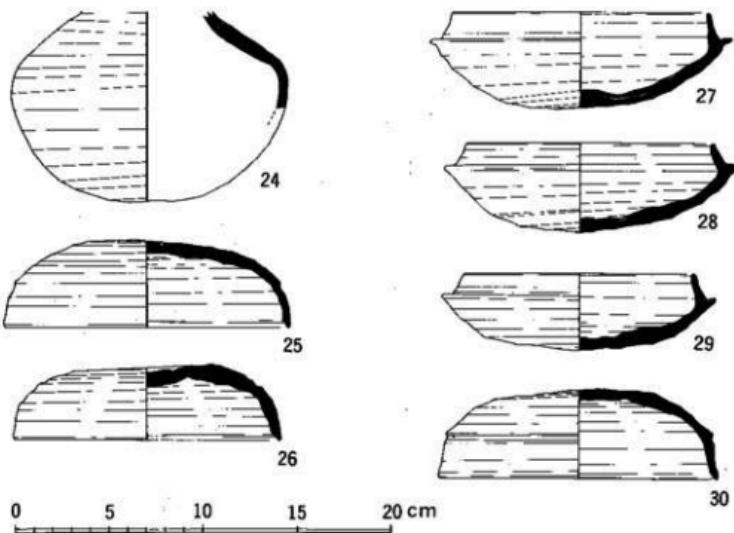
22



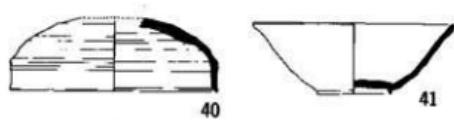
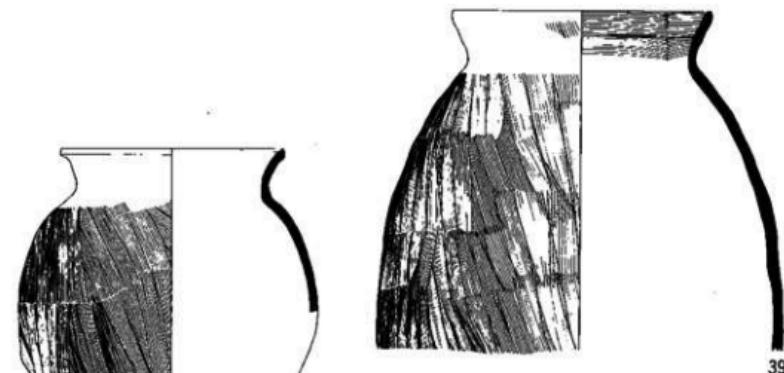
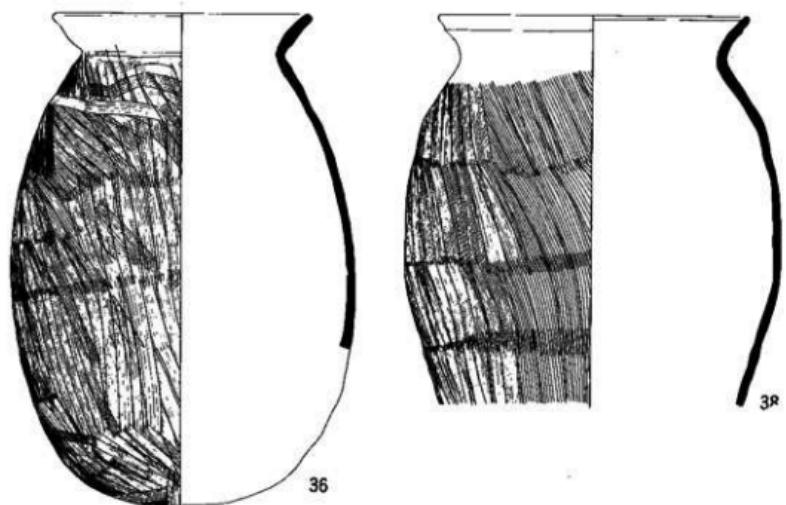
23

0 5 10 15 20 cm

図版12 SK-1・5出土遺物実測図

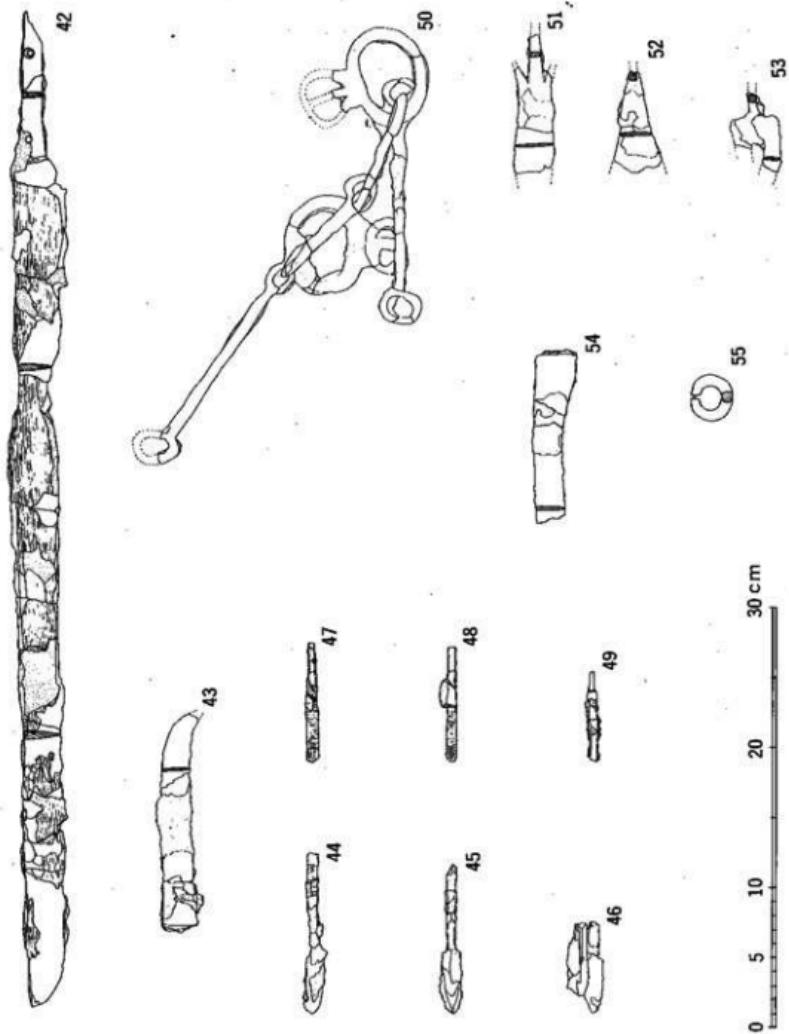


圖版13 SK-9-3-3號墳周溝內出土遺物實測圖



0 5 10 20 30 cm

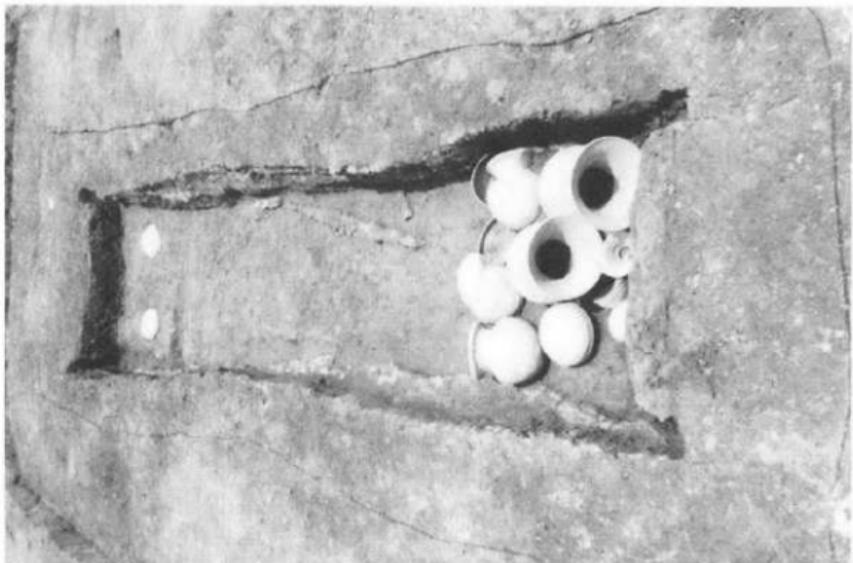
図版14 18T・6号墳・8号墳・SK-7出土遺物実測図



图版15 1号墙主体部・SK-1・SK-9・3号墙周溝内出土遗物実測図

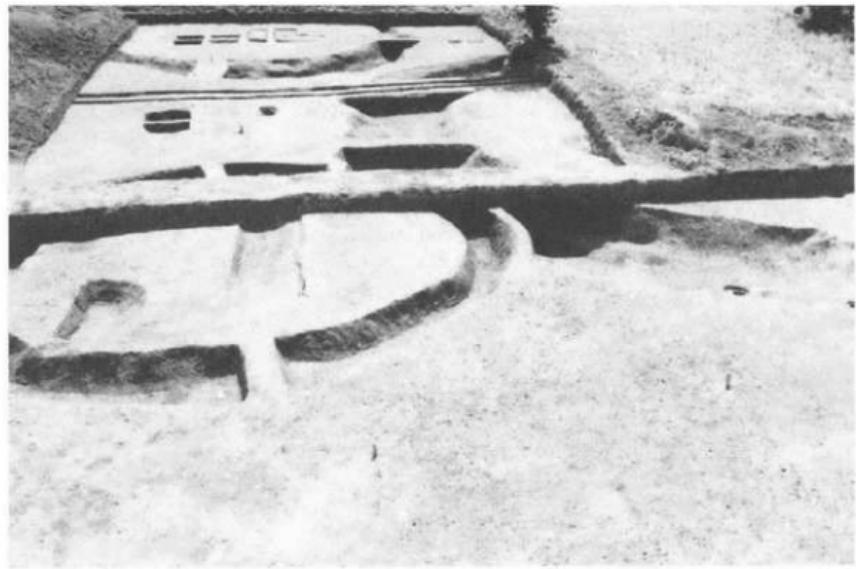


1号墳 主体部遠景



図版16

1号墳 主体部近景



3、4、6号墳全景

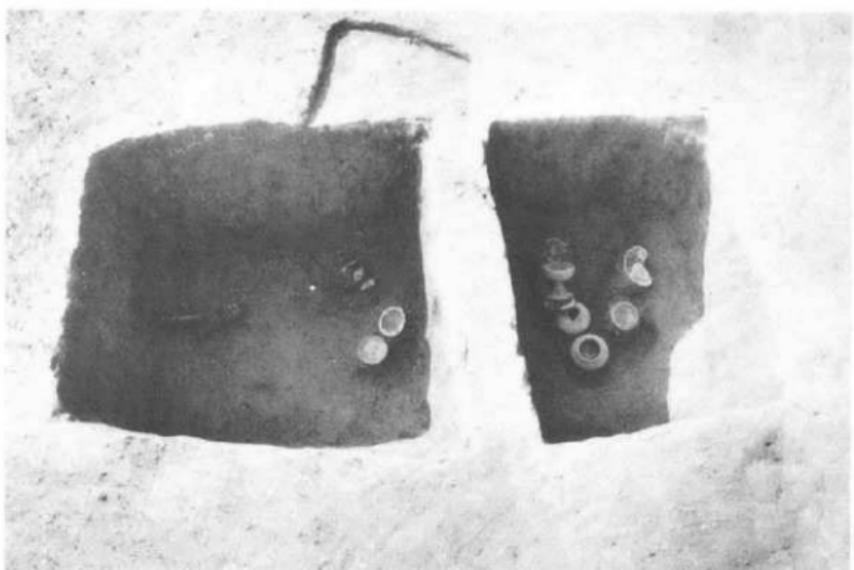


図版17

3号墳全景

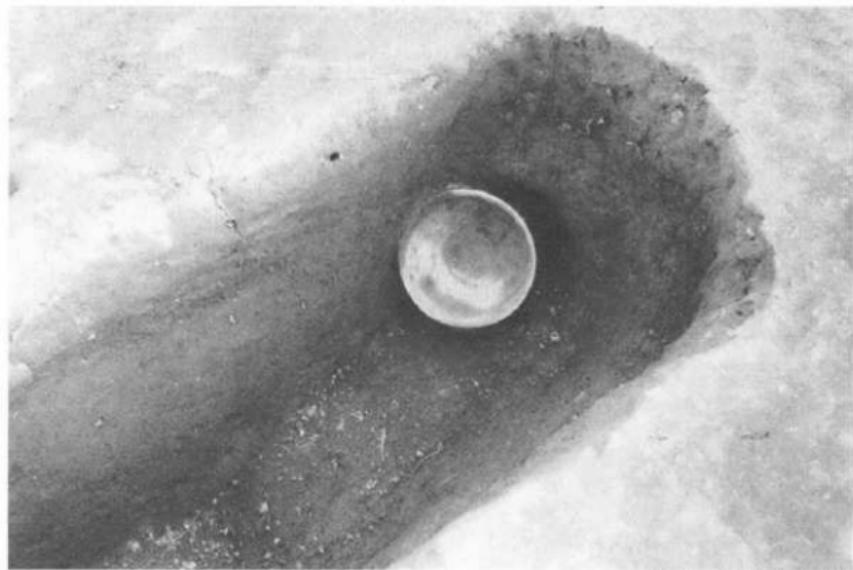


16-T 全景



图版18

1号土坛基全景

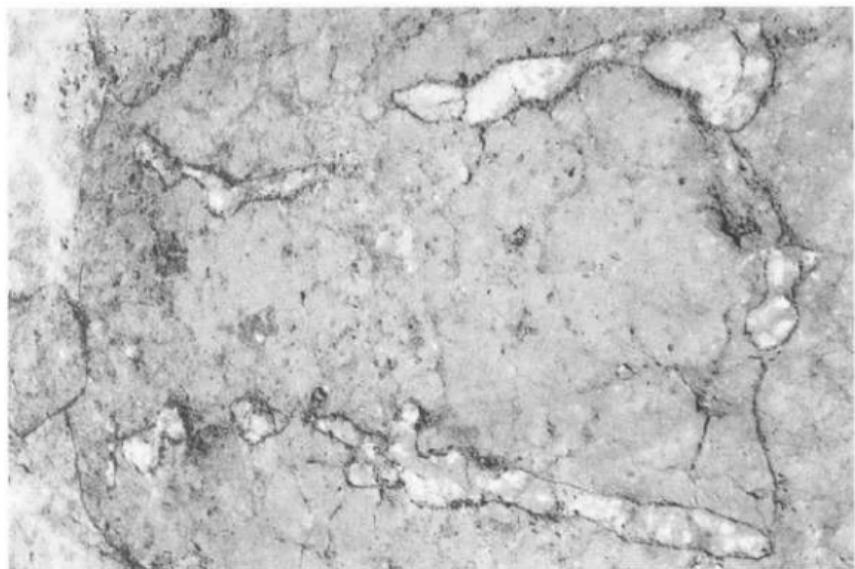


S K - 3 遺物出土狀況



圖版19

S K - 5 近景



S K - 6 近景



图版20

S K - 9 遗物出土状况



S X - I 馬齒出土狀況



圖版21

19-T 全景



1



3



2



4



5

图版22

1号填 主体部出土遗物



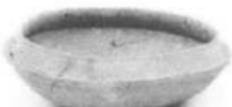
7



6



8



11



9



12



10



13

図版23

1号墳主体部・SK-5出土遺物



14



17



18



15



19



20



21



16



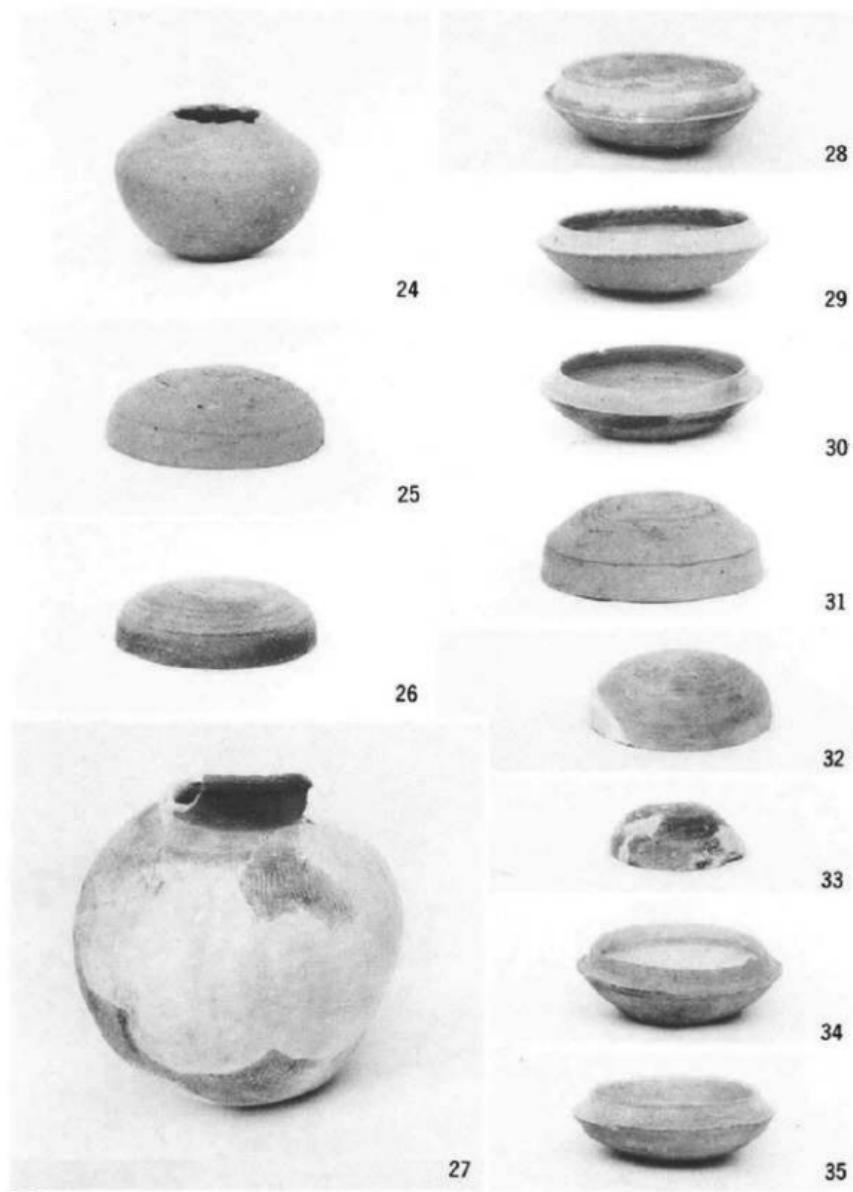
22



23

図版24

SK-1・SX-5出土遺物



図版25

SK-9-3-3号墳周溝内出土遺物



36



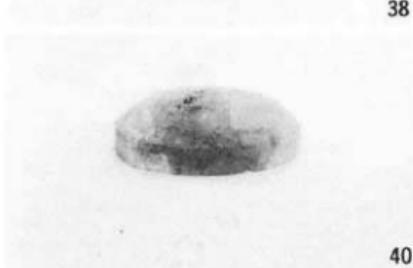
37



38



39



40



41

图版26

18-T·6号墳·8号墳·SK-7出土遺物

彦根市埋蔵文化財調査報告第9集

葛籠北遺跡

1985

編集 彦根市教育委員会

発行 彦根市教育委員会

印刷 サンライズ印刷株式会社

